

養鶏産業で成功するために（続）

株式会社アスコ 附属研究所
顧問 船橋 史憲

前回の各論的なお話をしましょう。

雛購入者の飼育規模が大きいと孵化場は種鶏ロットの数を1~2群から3~4群にせざるを得ないと雛の抗体のバラツキが大きくなり、基礎免疫として生ワクチンの投与回数を増やさなければなりません。特にIBDについては1回投与を2~3回までの範囲で行います。またMG・MSの抗体保有雛については初生時と2週齢時の生ワクチン投与後の投薬が最小限必要になります。またCAV抗体フリーの雛は育成前期の育成率低下の危険性を考慮せねばならず、性成熟後のマレック病発生のリスクが高まります。

雛のMDワクチン抗体の調査ではかなり抗体の低い鶏が散見されます。初生時の接種ミスやワクチンの接種量不足が原因とされており、また卵内接種も種卵の大きさよりも接種時期による胚仔の大きさに差があり、胚仔内か外かでワクチンの効果に差が見られます。

同じ育成舎で、同時餌付けをしても孵化場が異なると、育成率が3%も違うことが時々見られます

デビーク(ビークトリミング)は7日齢前後が適期ということですが、鶏種間で嘴の硬さに大きな差異があり、特に柔らかい雛の方が切りにくいようです。アニマルウェルフェアの精神からもベテランが注意深く実施し、切りすぎのない様にしなければなりません。

今市販されている鶏種の体格は完熟体重からみても1720~2100gと様々ですので1羽あたりの適正スペースは異なります。また体格の大きい鶏は卵も大きく、今の市場は大玉を以前に比べて嫌う傾向があり、値も安いので、強制換羽は赤鶏とか大型鶏での実施は不利になります。色のついた卵が30%を超えている現状で赤とかピンク卵を特殊卵とした販売は今後基準も厳しくなりますし、最近では白色卵での特殊卵化が増えています。

赤玉鶏では産卵の後半になると色ボケが増え、また魚臭の問題もあり、飼料中の魚粉、魚油、コリン、ナタネ粕などの存在でクレームが出やすくなります。コクのある卵とこだわっても臭いの問題でジレンマがあります。

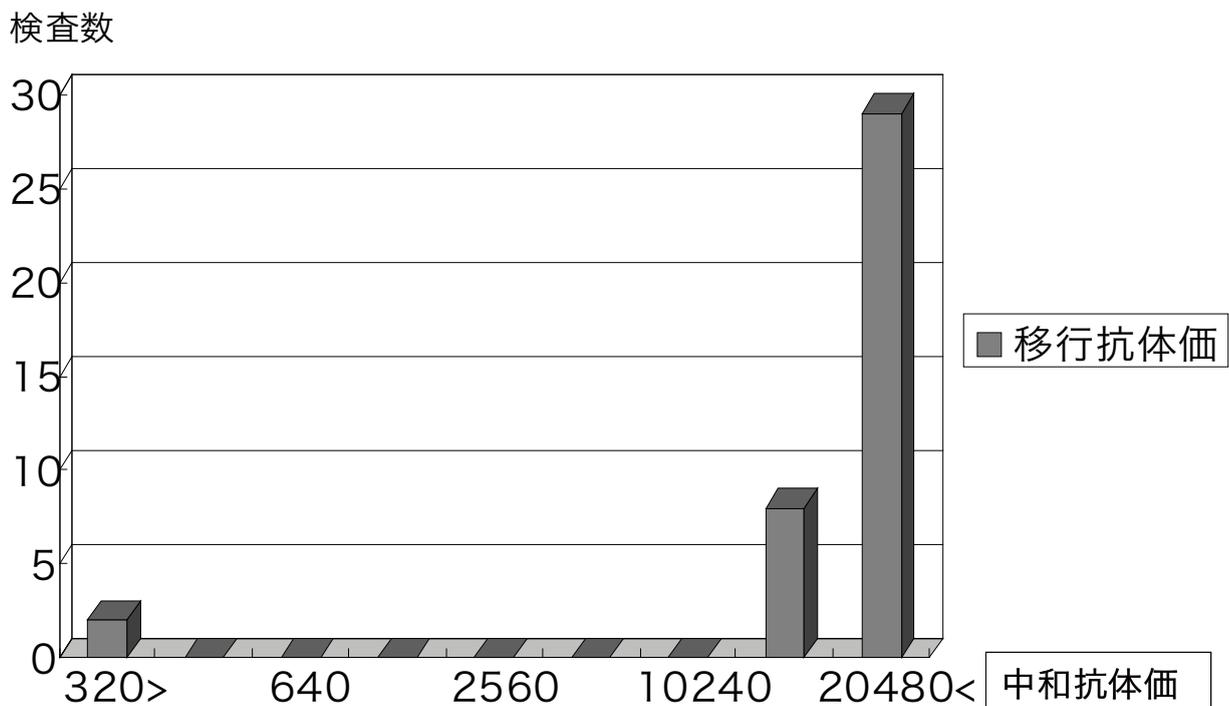


図1. IBDの移行抗体の実態 初生時

雛に期待したいことに遺伝的に体格の均一性と病気に対する抵抗性が高いことが希望されます。マレック病(MD)は最近の研究ではB型の血液型のなかでも21-21をホモに所持するオスを利用することで、抵抗性を高めた雛を供給している鶏種もあります。体格と卵の大きさは比例するので、最近のように小さめの卵をバラツキなく多く要求されつつある養鶏の現場では、室温・水温の管理がし易い鶏舎が必要ですし、色々なデータ管理をするためにもセンサーや計数器の設置と適正な管理も要求されます。品質の良い安全で美味しい卵を生産するには良い雛だけではなく、良い餌・良い管理で経営を続けるために良い設備が必要であり、それを使いこなす人間力がかもっとも大事です。

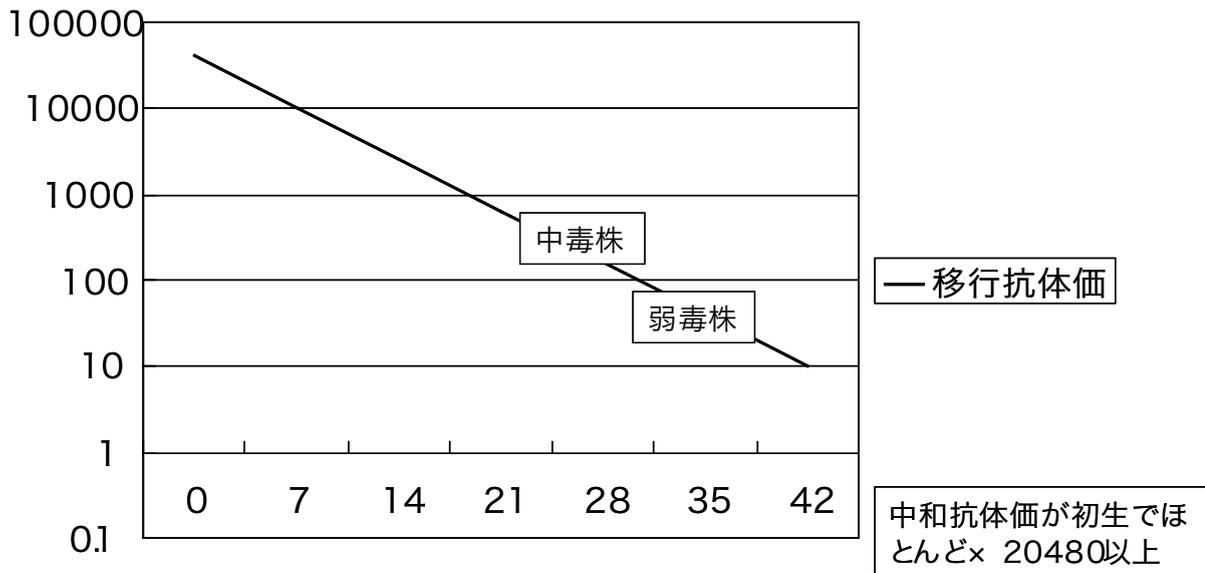


図2. IBDの移行抗体の推移 半減期3.5日

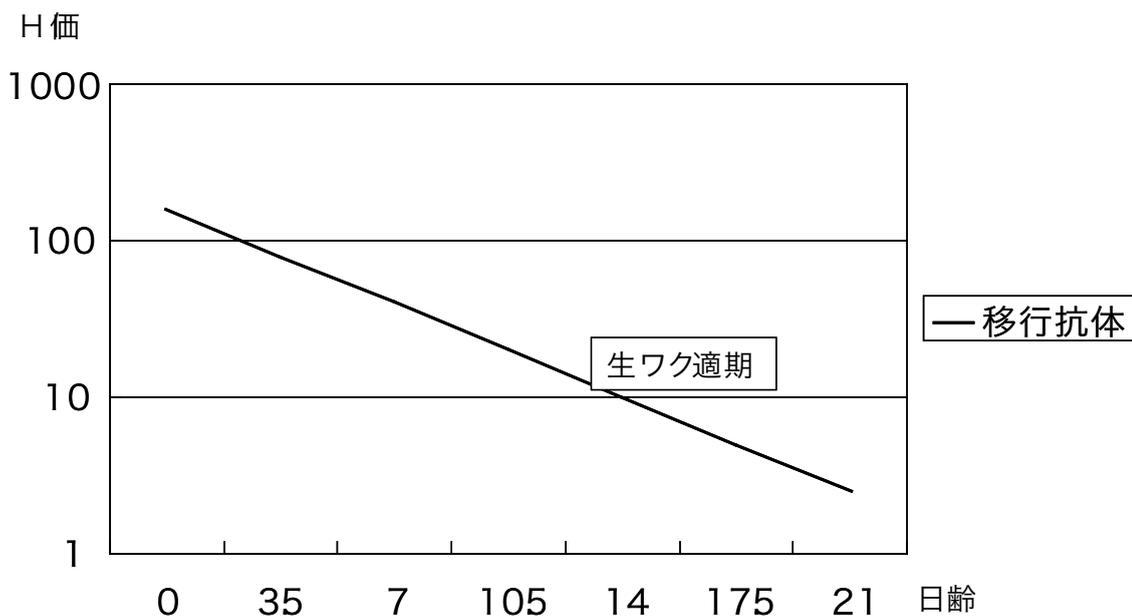


図3. NDの移行抗体の推移